



発行所  
カトリック長崎大司教区  
本部事務局  
〒852-8113  
長崎市上野町10-34  
カトリックセンター内  
TEL 095(846)4246  
FAX 095(842)4460

# 「戦争、もうやめよう！」

樋口 美作

日本ムスリム協会名誉会長

今や世界のどこにも安全な場所はない。そんな思いを強くする世相である。テロ撲滅を理由に開始した、アフガニスタンやイラク戦争の後も、一部過激派による爆破テロ事件は後を絶たず、しかもその範囲は世界的な広範なものとなり、その対象と手段は一層複雑化し、深刻化する傾向にある。

世界の大国は弱者に対して、とかく自己のルールを押し付け、紛争を武力行使によって解決しようとする。しかしそのために多数の尊い人命が失われて次のテロを生むという悪循環を露呈しているのが現状ではないだろうか。過去の時代はと

もかくとして、二十一世紀における紛争の解決はその原因を究明し、国連を中心とする複数国家による、あくまでも対話による平和的解決の方法でなければならない。

紛争や戦争がとかく宗教によるものであると考えられがちであるが、それは全ての事象の根底に宗教が関わっているためである。またそこには宗教の名を借りた、政治的権力者や過激派の打算と恣意が大きく関わっていることを忘れてはならない。どんな宗教と言えども、人命を軽視する宗教はありえない。聖カールアン(コーラン)は、人命の尊さと殺人の罪の重さを次のように教えている。

「人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺す者は、全人類を殺したと同じである。人の生命を救う者は、全人類の生命を救ったのと同じである。」(5章32節)

半世紀にわたって未解決になっていたイスラエルとパレスチナの中東紛争にしても、何がその原因であり、またあつたのか歴史的事実を直視し、自爆攻撃まで仕掛ける民衆の心の根底に何があるのか冷静に見極める必要がある。この原因を作った欧米の大国は、自らの責任によってこの問題解決に最大限の努力と誠意を示すべきである。

今日まで日本の宗教者は、人類の安寧と世界平和実現のため、内外の宗教者との対話を通じて並々ならぬ努力を重ねて来た。その記録は「和の祈り」と題した世界連邦日本宗教委員会創立三十年記念誌と、当時人類愛善会会長であられた廣瀬静水師の記念講演「宗教協力の地球的連帯をめぐして」および「WCRP、世界宗教者平和会議三十年史」の中に詳しく紹介されている。

「権力には暴力がつきまとう、その暴力を薄めるのが宗教者の使命だ」とはかつて電力の鬼と言われ、戦後の日

本の電力事業に献身された松永安左衛門氏の言葉であると先輩の先生に教えられた。暴力を薄めるとは何を意味するのでしょうか。我々宗教に携わる者には、今も大きな将来的役割が問われている。

五年前、当時前比叡山延暦寺代表役員執行であられた小林隆彰師は、元在大阪・神戸ドイツ総領事ニルス・グルーベル氏と「西は東から何を学ぶのか」の対談の中で、グルーベル氏の「要求と奪いの精神構造を脱出する方法がありますか」の質問に、「結局、こころを直すのはこころしかありません、要求と奪いの精神構造を改める道は、まず『返す』ということだと思つ」と言われている。また弊協会の留学生はイスラームの現地に行つて感じた事を次のように手紙で伝えてきました。「信仰は信仰によつて生まれる、知識の蓄積だけではない」と。私はこれらの言葉にこだわるのであります。

神を畏れる心、敬神の心こそ個々の人間の暴力を薄め、人類が共生する基本的な要素であり条件であると思ふ。心が変われば世界が変わる。この事を銘記したいと思ふ。

第25回世界連邦平和促進全国宗教者長崎大会・シンポジウムでの発表要旨

# Q&A「宗教者による平和促進」



Q. いま地上を見渡すと、宗教はむしろ平和促進を妨げているのではないかと思えてくるのですが……。

A. いま注目を浴びているのはイラクですが、確かに宗教がらみの闘いがなされているように見えます。この地に根づいたイスラム教と、違った民族と結びついたその分裂した宗派とが、互いにいがみ合っている部分が確かにあるようです。

しかし、それは宗教そのものというより、その宗教に属する人間の問題に起因しているのではないのでしょうか。イスラム教の経典であるコーランにさかのぼれば、それは戦争を推進するものでも何でもないからです。

人を愛すること、花開くはずの、人間が本来もっている形を封鎖してしまう動きが宗教を奉ずる者の中にも現れ出てくることに、混乱の原因があると思われれます。

Q. 宗教というより、それに属する人間が分裂を引き起こしているのですか。

A. 旧約の救いの歴史は、主の命令に従って、アブラハムが故郷であるカルデアのウルを出発したところからはじまります。そのウルという町は、現在のイラク南部にあつたといわれています。

創世記の楽園がどこにあつたかというのは重要なことではありませんが、もし仮にイラク南部辺りにあつたとすれば、楽園喪失を地で行く形がいま現れていると言えなくもありません。

ご存知のように、楽園は「いのちの木」と「善悪の知識の木」が中央に二本そろって成り立っていました。その一つである善悪の知識の木を、人間は占領してしまつたのです。こうして、いのちの木がおびやかされることになりました。

人間は自分を中心にして善悪二元論に走りたがり、自分を善の世界の中心において他を断罪しはじめます。これが、今も昔も変わらない人間が楽園を喪失するときの原形です。

Q. 宗教がその楽園喪失をくい止めることはできないのですか。

A. もちろん宗教の目指すところは、人間を楽園喪失から守ることです。そのために、イエスさまは誰も断罪することなく、いのちの木である十字架の木のぼられました。完全に自分を無とするところから本當のいのちが復活することを示されたのです。

ところが、そのいのちの復活という中心部分を忘れて、教団維持に走ったり、律法主義とか教条主義などと言われるほどに人間の思考が優先されることになって、また分裂と争いに巻き込まれる結果になってしまいました。まさに、人間の知恵の支配が優先し、善悪の知識の木の実を食べてしまうのです。

Q. 去る11月25日・26日に、「世界連邦」の名を掲げ平和促進をめざして、多くの宗教者が全国から長崎に集まつたということですが、平和促進につながつたのでしょうか。

A. この大会のテーマは、「もう戦争をやめよう」という願いを込めた「共生（ともいき）の祈り」というものでした。共生は「きょうせい」といったり、「ともいき」といったりしますが、このことばは、この新しい世紀の鍵となることば、すなわちキーワードになりつつあります。

このテーマに沿って、大会では諸宗教者による平和の祈りが捧げられ、磯村尚徳氏の「文化の多様性と平和」についての講演があり、イスラム教の方も交えた平和シンポジウムがなされました。

こういう行動を通して、世界平和は、他を断罪する一国主義とか原理主義や律法主義などに染まってしまった、一宗教主義では促進できないことをアピールしようとしたのです。「世界連邦」といういい方も、世界が一つの政府を作って一つの国になるという意味も含まれてはいますが、「共生」ということばの言い換えであり、具体化のことでもあります。

Q. それぞれが懸命に平和のために祈るのは良いことですが、何も聖堂の中で、しかも内陣で他の宗教の祈りをしてもらうことはないのではないかと、という意見もありますか……。

A. 一宗教主義や同質の世界にだけ慣れ親しんできた方々にとっては、何か違和感を覚えるものだったようです。そういう意味では、慎重さと賢明さが必要なことだと思います。

事実、今回も一つの意見があったようです。とても感動したという方々は、そこに互いを大切にする共生の根本を見たようですし、平和づくりの教訓を学んだようです。

批判的な方々は、けっして他の宗教を邪教として退けるわけではないが、奥の間である内陣にまで上げることはなかったのではないかと、ということのようです。一般の家でも、一歩引き下がって、玄關とか違うところで出会う用をすまうのが普通ですから。

ここで問われるのは、それぞれの宗教の最高の行為である本来に真剣な祈りをどうとらえるか、という信仰のセンスの問題だと思います。

Q. どの宗教でも認めて大切にするのならば、宣教は不要になるのではないのでしょうか。

A. 昨年10月に列福されたマザー・テレサが、初期の頃そのような質問を受けたと言われています。というのは、マザーは貧しい人の世話をするにあたって、それぞれの宗教をほんとうに大事にしたからです。ヒンズー教徒にはヒンズー教の経典を唱えてあげたし、イスラムの人にはコーランを読んで死に水をとってあげました。もちろん、宗教を持たない人にはイエスさまを紹介しました。そのような自分をセルフレスつまり無にした行為によって、逆に宣教は進みました。そしてそれが平和促進の決め手として評価され、ノーベル平和賞が与えられ、異例の速さで列福される理由になったのだと思います。

Q. 仏教のお坊さんに嫁ぐカトリックの女性もいる時代なので諸宗教の交流は大切だとは思いますが、混ざってしまったって、何が何だか分からなくなる危険もあるのではないのでしょうか。

A. 確かにそういう危険はあります。だからこそ、この大会では「共生」ということを大事にしたのです。この点については、この大会の閉会式での主催者の次のあいさつが印象的でした。

「宗教者に限らず、およそ共生の道を歩もうとする者の中には、二つの迷い道が待ち構えています。一つは、薄めて混ぜて一つ、といういわゆるシンクレティズム(宗教混交)の道です。その前途には、底の浅い妥協の世界しかありません。

もう一つは、わが色一色に染めようという一国主義・一宗教主義の道です。この道の向こうに見える景色は、いま地の上に現れ出ているように、火薬のにおいをする修羅場です。

共生の道は、そのいずれでもありません。それは、『違って一つ』という離れ業を達成しようとする道です。互いをほんとうに大事にしつつ、しかも一つとなる道です。この道は、神仏の助けなしにはとうてい適うものはありません……。」



# 小教区を活性化させるために (5)

## 小共同体中心の教会

これまで4回にわたって、さまざまなタイプの小教区像をながめてきました。私たちが属している小教区は、どのタイプに近かったのでしょうか。

今回は、5番目のタイプの、「小共同体中心の教会」と呼ぶこともできる小教区像について考えていくことにします。

### 1. 絵が表していること

左の絵は、私たちがめざす理想の小教区像を表したものです。

この絵の小教区の基本となっているのは、「小共同体」です。これまで提示した4つの絵と比較しながら、この「小共同体」中心の教会の特徴がどこにあるのかを考えていきましょう。

①これまでの絵と大きく違っているのは、小教区のほとんどの信徒が、10名ほどのメンバーで作られたグループ（小共同体）のどこかに属しており、大きな本を広げて話し合っているところと、この本は聖書を表しており、み言葉の分かち合いが彼らの生活の中心となっています。

②それぞれのグループから外側へ向かっている矢印は、彼らが自分たち信徒以外の隣人に対しても関心を持っていることを表しています。

③各グループ同士をつなでいる、また各グループと聖堂との間にある線は、各小共同体が互いに連携を保ち、小教区共同体そ

のものとも結ばれていることを表しています。



④黒いスータンを着た司祭がいるグループは小教区評議会を表していますが、このグループの中央にも大きな本があります。

これも聖書です。小教区評議会も、共にみ言葉の分かち合いをしながら、神の望み豊かな小教区共同体を作るための活動をするのです

⑤聖堂内の様子もこれまでのものとは違います。祭壇の上には、聖書とカリスがあります。聖堂には、各小共同体に属する小教区の全信徒が日曜ごとに集まり、ことばの典礼と感謝の典礼とが一体となった聖体

祭儀を通して、主キリストと出会い、癒しと新たな力を得て各自の生活の場へ出かけしていきます。

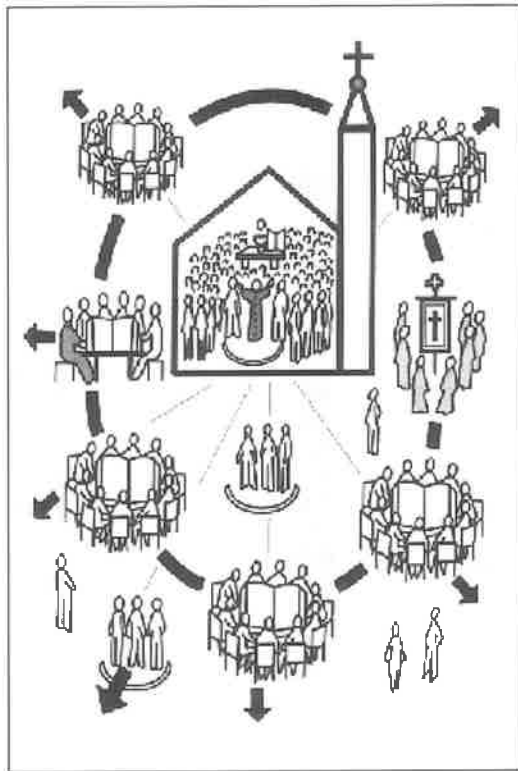
### 2. 小教区評議会の役割

この「小共同体中心の教会」での小教区評議会の役割は、3つ目のタイプの「小教区評議会中心の教会」のものと比べて、より積極的に前向きなものに変わっています。

現在教区で見直し作業が進められている小教区組織の改革問題にも、この観点からの検討が織り込まれつつあります

①小教区評議会の役員たちは各小共同体（班）から選ばれるので、情報や提案などが各小共同体から小教区評議会へ直接伝えられるし、小教区評議会からの連絡なども直接各小共同体へ伝えられます。相互交流のための二つの流れがあるわけです。

②小教区評議会は、小教区全体の取りまとめの役割をします。



③ その役員たちの任務は、小教区共同体に属している人たちが全員に希望と勇気を与え、信徒一人ひとりの使徒的活動の手助けをすることです。

### 3. 私たちが目指す小教区

私たちが目指そうとしているのが、この「小共同体で結ばれた小教区共同体」です。それがどのようなものなのかを再確認するために、ポイントを整理してみます、以下のようになります。

① 一つの小教区は、多くの小共同体(班)によって構成されます。

全信徒は、自分の住んでいる地域の小共同体のメンバーになります。

② すべての信徒は、聖霊の恵みによって自分に与えられているカリスマを有効に活用するよう努力します。それぞれの信徒は、そのカリスマを自分が属する小共同体活動を通して活用することによって、教会全体のために貢献します。

③ 小共同体活動の基礎になるのは、「み言葉の分かち合い」です。信徒たちの基本的な信仰の養成は、この小共同体の中での

されていきます。

④ すべてのキリスト者は、各自の能力に応じて隣人に奉仕するよう召されています。

⑤ それぞれの小共同体(班)は、互いに堅く結ばれています。各小共同体は、自分たちの小共同体から選ばれた小教区評議会役員を通して、小教区全体とつながっています。また、小教区評議会を通して、地区や教区とのつながりも保ちます。

⑥ 主日の聖体祭儀は、小教区のすべての信徒が一方所に集まり、キリストとともに御父に感謝をささげる、一週間の生活全体の中心となる集いです。

⑦ すべてのキリスト者は、キリストをまだ知らない人々にもキリストの福音を宣べ伝える使命を受けています。経済的、政治的、社会的次元でもこの世に影響を及ぼしながら、社会全体の福音化に貢献していく使命を担っています。

これまで5回にわたって、さまざまなタイプの小教区像をながめてきました。見方を変えれば、小教区の成長過程を確認してきたとも言えるでしょう。現在自分たちが属している小教区は、どのタイプの要素が強いでしょいか。また、なぜそう考えるのでしょうか。そして、理想のタイプの小教区に変化するために、自分たちの小教区が優先的に取り組むべき課題は何なのでしょう。

#### \* \* 「小共同体入門講座」のご案内 \* \*

\* 日時 : 2004年4月20日~7月6日  
19:00~20:30  
(毎週火曜日・計10回)

\* 場所 : カトリックセンター・講堂

\* 受講料 : 7,000円 (全回受講を原則とする)

\* 申込み用紙のお求めは、3月以降に下記事務局にて

長崎教区生涯養成委員会

TEL (095) 841-7731





# 「シリーズ」現代を生きる信仰

みやかわ としゆき  
宮川 俊行

長崎教区司祭



—— どう理解すれば？ ——

## 福者マザー・テレサに倣う

なら

学ぼう

世界のすべての人が

マザーを敬愛

昨年10月19日、「神の愛の宣教師会」の創立者マザー・テレサ（1910・1997）が列福された。神に自己を捧げ、貧しい人々のための愛と奉仕の活動を貫き通した修道女である。

注目に値するのは、マザーが世界のすべての人から非常な敬愛を受け続けていたことである。マザーの人格のすばらしさと活動の偉大な価値は、どの宗教の信徒にも無宗教者・無神論者にも理解できた。また国籍や人種、文化の違いを超えて、すべての人に受け入れられた。その生き方は万人を感動させ、すべての人の心を動か

すちからを持っていた。マザーの施設を訪れ、一緒に働かせてほしいと申し出る男女の数は計り知れず、多数の日本人もその中にいた。マザーの葬儀には国籍や宗派を超えて世界中から人々が集まり、マザーの功績を讃え、その死を悼んだ。今回の列福式も、世界各地から集まり

バチカンのサン・ピエトロ広場と周辺の街路を埋め尽くした<sup>30</sup>万人を超える人々の中には、カトリック信者だけでなく多くの非カトリック者もおり、列福の喜びを共にしたという。世界はマザーによって一つにされた。

わたしにとって

マザー・テレサとは

列福の意味は何であろう。教皇ヨハネ・パウロ二世は列福式のミサの説教の中で、「マザー・テレサの模範に倣おう」と呼びかけた。

マザー・テレサの列福は、単に、一修道女の生前の功績を公に讃え、その生き方が神の前に高く評価されるものであることを教皇が保証する、というだけのものではなく、マザーの生き方はすばらしい手本であるからこれに倣おう、というカトリック信者への招きでもある。「マザー・テレサのような生き方をしよう」、という呼びかけである。

どのように倣う？

何を倣う？

この招きは、われわれにマザー・テレサと同じような社会福祉

活動を行うようにという勧めであろうか。マザーと同じような生き方をし、同じような活動をするようにという呼びかけであろうか。そうではない。現在の生活を棄ててあのような生活に飛び込める者は、仮にいても極めて少ないであろう。マザー・テレサは「特別に優れた信仰者、例外的な、英雄的な道を歩んだ、讃えられるべき模範」である。そのままの真似など一般人には不可能であり、神から求められてもいない。

では、何を倣うか。「マザー・テレサを生かしていた精神」を自分も持つことである。これなら誰にでもできる。ある程度ならできる。

「相手の人は、道理に合わない、身勝手に自己中心的な人と感じられるかもしれません。」

でもとにかく、その人を愛しましょう。

たとい善いことをしても、非難されたり、利己的な人間だとか、腹の底に野心を持つている人間だとか悪口を言われることもあるかもしれませんが。でもとにかく、善いことをしましょう。

長期にわたる自分の努力が生んだ善い実りも、人々から無視されたり、すぐ忘れられてしまうことになるかもしれませんが。でもとにかく、善いことをしましょう。

自分が誠実・正直であるため、かえって傷つけられることがあるかもしれませんが。でもとにかく、誠実・正直であり続けましょう。

数年かけて、こつこつと築き上げてきたものが、一夜にして崩れ去るかもしれないでもとにかく、築き上げていきましよう。

人々は本当に助けを必要としています。しかし、実際に手助けをすると、反対に責められることもあるかもしれません。でもとにかく、手助けをしましょう。

持ち物の中で、一番良いものを人々に与えましょう。面と向かって苦情を言われるかもしれませんが、持ち物の中で一番良いものを人々に与えましょう。」

これは、カルカッタのマザー・テレサの施設「シシュ・バヴァン（聖なる子どもの家）」の壁に、「でも、とにかく」という表題の下に英語で書かれていた文章だという。東京教区・粕谷甲一師が書き写して来られ、邦訳して数年前に『カトリック新聞』で紹介された（ただし、分かりやすくするために、ここでは若干、訳の表現を改めた箇所もある）。

わたしも

マザー・テレサの精神を

粕谷師によれば、書いたのはマザー・テレサだが、自作のものとして書いたのかどうかは不明とのことであるが、少なくともこれがマザー・テレサとその協働者たちが心に決めていることを言い表したものであることは間違いない。困難の中でありながら、活動に際しての自分たちの最高方針を絶えず確認し合っていたのであろう。

ここに見られるのは、「主イエス・キリストの復活」の信仰に根ざす、「善によつて悪に勝とう」という積極的な生き方である。「悪に負けない」という態度である。これこそ、マザー・テレサが貫き通した生き方である。

わたしたちが倣うべきマザーの生き方、自らのものにすべき「マザーの精神」はまさにここにある、と言えよう。この「精神」で生きるとは誰にでもできる。完全な実践は困難であるにしても、小さなことから始めることなら、すぐできる。少しずつ実践目標を広げ、成長を目指すこともできる。

私をお使いください！

「マザー・テレサの祈り」より

主よ、今日一日

貧しい人や病んでいる人々を

助けるために

私の手をお望みでしたら

今日

私のこの手をお使いください。

主よ、今日一日

友と呼ばれる小さな人々を

訪れるために

私の足をお望みでしたら

今日

私のこの足をお使いください。

主よ、今日一日

人というだけでどんな人々も

愛するために

私の心をお望みでしたら

今日

私のこの心をお使いください。



「たらたら」学「入門」 ⑪

講師 たら福蔵



I こう聞かれたら・・・？  
ある日子どもに、「神さまってどんなすがたをしているの？」と聞かれたら・・・。

II こう答えたら・・・！  
①「そりやおまえ、神さまは霊だから、色も形もないんだよ」と答える。

②「イエスさまは神さまだから、イエスさまをよく見つめていれば分かってくるよ」と答える。

③「人間は『神の似姿』（創世1・27）だといわれるから、その似姿だと思えるような、拝みたくなるような人を見れば分かるのよ」と答える。  
④その他・・・。



III こう考えてみたら・・・  
人間が神さまの似姿であるとすれば、人間を見れば神さまの姿が見えるはずだ、ということになります。そう言われてもピンと来ないので、神さまはこんな姿をしているんだと分かる姿になってこの地上に来られた方が、イエス・キリストだということになります。  
イエス・キリストは、人間の姿で現れた神さまです。その姿は福音書に描かれているの

で、その中身をくり返し味わえば、神さまの姿が浮かび上がってくるようになります。

ここまでは理屈です。その理屈どおりにいけば何も問題はありません。しかしそれが簡単にいかないのが、人間はその福音書の表現をピンと来るようなものにしようとして、努力を重ねるわけです。

そこで、神さまの似姿としての人間について考えるというより、神さまの似姿が見える目を養うためにはどうしたらよいか、という視点が必要になります。

そのためには、まず他人を見る目を養うことが大切です。他人を見たらドロボウと思えるという言葉があるように、私たちには人間の悪いところや欠点を見つげるためにはそれほど努力はいりません。しかし、善いところを見つげるのは容易ではありません。

すべての人が神の似姿として造られているので、だれもが何か光るものを持っているはずで、そこで、それを見る習慣を身につけることが大事になってきます。そして、自分や回りの人の中に光るものを見つけたときの喜びをよく覚えておけるなら、その訓練は似姿発見に大いに役立つことになります。

そのために役立つ話として、二つの挿話を紹介してみます。

アシジのフランシスコがある田舎道を歩いていたら、一人の貧しい人に出会いました。

聖人は何も持ち合わせがなかったので、着ていたマントをあげました。その人は、まだ寒いので下着もくれと願いました。聖人は裸になつてしまいました。しかしその人は、まだ寒いので抱きしめて暖めてくれと言いました。聖人は言われるとおりに必死になつて抱きしめてあげました。そうしたら、その人の顔がイエスさまの姿に変わり、輝いて見えました。

もう一つは、マザー・テレサの話です。いわゆる二つの聖体拝領の話です。行き倒れになっていたおばあさんを、連れてきて、きれいに洗って抱きしめると、ようやく気がついて、「サンキュー・シスター」といいました。その顔の輝きは「ソー・ビューティフル（とても美しい）」だったそうです。それはイエスさまご自身だということにもなります。

神さまの姿がどんなものかを頭で考えるより、似姿としての人間の中にその姿を見る目を養うよう努めてみたら・・・。

IV 参考にしてみたら・・・  
「カトリック教会の教え」12ページ以下





# キリスト教の季語について

俳句の季語を集めた歳時記に、だんだんとキリスト教に関連するものが増えてきました。信者でなくても、その季語を用いて俳句を作っています。

どんな季語が入っているのかを、春夏秋冬、および新年に区分してみました。

四季の区分は、それぞれ立春、立夏、立秋および立冬からスタートし、新年は冬の中から独立させています。なお季語には、基本となる季語に加えて、それに関連する季語もあります。一例として、クリスマスに関連するものには、降誕祭、聖誕祭、聖夜、クリスマススイブ、聖歌、聖樹、聖夜劇、サンタ、クリスマスセール等があります。

紙面の都合で、詳細を書くことはできませんので、以下四季に分けて基本季語に入っているものを列記いたします。どの日なのか、どんな意味をもった季語のかなど、お知りになりたい方は、俳句歳時記を利用してください。

## 〈春の季語〉

二十六聖人祭、バレンタインデー、聖ヨゼフ、御告祭、謝肉祭、灰の水曜日、四旬節、受難節、棕櫚の日曜日、聖週間、聖木曜日、聖金曜日、聖土曜日、復活祭、白き日曜日

## 〈夏の季語〉

聖母月、昇天祭、洗者聖ヨハネ祭、聖ペテロ祭、聖パウロ祭、聖霊降臨祭、三位祭、聖体祭、聖心祭

## 〈秋の季語〉

被昇天祭、聖母生誕祭、十字架祭、聖ミカエル祭、天使祭、ロザリオ祭、聖体行列、諸聖人祭、諸霊祭

## 〈冬の季語〉

待降節、聖ザビエル祭、クリスマス、聖ヨハネ祭、納めミサ、公現祭、聖家族祭、御潔め祭

## 〈新年の季語〉

初ミサ、初礼拝

一番多く使用されている季語はクリスマスですが、一番目は復活祭でしょう。

多用される復活祭に関連した季語には、イースター、イースターホリデイ、染卵等があります。

この他にも、聖母月、四旬節、バレンタインデー、初ミサ等の季語を使った俳句は、いつも目にしています。

俳句の分野では、季語を通じてではありませんが、キリスト教に対する認識と理解は深まっている感じがします。

長崎にゆかりのある二十六聖人祭も地元の信徒俳人はもとより、長崎を訪問した俳人によって、俳句に読まれるようになりました。二十六聖人祭は音数が長くなるので、致命祭としても詠まれています。致命とは命を捧げることですから、この季語には、聖人たちへの尊敬がこめられています。

その二十六聖人祭が詠まれた俳句いくつか列記してみます。



暮れてなほ空透きとほる致命祭  
下村 ひろし

二十六聖人祭の待者幼な  
小田部 胤明

修院の冷えし聖堂の致命祭  
景山 筍吉

この丘に坂のあつまる致命祭  
朝倉 和江

連禱の夕べ雲るる致命祭  
山下 青芝

夕ざれの風尖りくる致命祭  
松野尾 藍

巡礼の夜を徹し来し致命祭  
小林 美智子

(木場田 秀俊)

# 郷土の信仰を 伝え続ける生涯



次兵衛神父様が隠れておられた岩（洞窟）でのミサ

長崎市の水がめといわれる外海町・神浦ダムのさらに上流、沢づたいに登ること約1時間半のところ、「次平岩」あるいは「次兵衛岩」と呼ばれる大きな岩がある。最近、その岩を尋ねたりそこでミサを捧げたりする人が多くなっているとのことである。

そこで先日、20名ほどでその岩まで登り、その岩の下で潜伏しておられた次兵衛神父様の苦難をしのびながら、「ペトロ・カスイ岐部神父ほか187殉教者」の早期列福を願って、ミサを捧げてきた。この地でミサが捧げられるのは22回目になる、とのことであった。

外海町・黒崎に生まれ、次兵衛岩をはじめと

する地域の潜伏キリシタンゆかりの地を案内しながら、外海の信仰の伝統を次の世代に伝えるためにひたすら自分の生涯を捧げておられる山崎政行さん（74歳）が、案内役を引き受けてくださった。

山崎さんは、みんなを引率して次兵衛岩に到着したとき、「神父様、また来ました」と言いながら、その岩に向かって深く一礼された。

その日私たちは、山崎さんに、次兵衛岩の由来などについて幾つかの質問をして、次のような説明をしていただいた。

## ◆ 次兵衛神父様のことを少し教えてください。

キリスト教禁制の江戸時代、マニラで神学を修め、不安と恐怖の中にある長崎の信者たちのために働きたいとの熱い思いから、1631年に上司の反対を押しひそかに長崎に帰って来た、大村出身のアウグスチノ会日本人最初の神父様です。

昼間は奉行の馬丁（ばてい）に成りすまして、桜町牢を訪ねて獄中の司祭や信徒を励まし、夜は家々を回って、洗礼を授けたり告白を聞いたりしていました。金罫（きんづば）の刀を差して武士に変装したりしていたことから、人々は「金罫次兵衛」と呼んでいたようです。長崎市戸町にある「金罫」という地名は、実はこの次兵衛神父様が隠れ住んでいたことに由来します。

密告によって正体を疑われた神父様が西彼杵半

島の山中に身を隠すと、奉行は四藩に命じて35日の山狩りをし、ついに1636年に捕らえられました。そして翌年の11月6日に、西坂の丘で逆さづりにされて35年の生涯を閉じました。神父様をかくまっつてその教えに耳を傾けていた多くの信徒も殺されています。

## ◆ この次兵衛岩はどのような経緯で

発見されたのですか。

長崎県にはキリシタンにちなんだ地がたくさんありますが、外海町は「キリシタンの里」として有名です。ド・ロ神父様が外海に残した数々の偉業は長崎のカトリック信者なら誰もが知っており、外海のシンボリック存在としての神父様のお人柄については今も語り継がれています。外海では、そのド・ロ神父様が赴任なさる200年以上前から、厳しい迫害の中で多くの宣教師や神父様が命を賭けて信徒のために働かれたことがよく知られてはいましたが、その詳細は不明でした。

1600年代前半に長崎と外海地方を中心に布教活動をしておられた次兵衛神父様が隠れ住んでいたといわれる洞窟が具民の森近くの外海の山奥にあったことは、大村藩の記録に残っていました。しかし、その場所が一体どこなのかは人々の記憶から忘れ去られていました。そこで私は幾度も山を歩き回り、1983年11月、ついにこの地にたどり着きました。そして、町教育委員会関係者やアウグスチノ会の神父様が当地を訪れて、これが伝説の岩に間違いないと確認できました。

確認された後は、1992年に外海キリスト教文化史跡保存会を作りました。そして、1994年には188殉教者の列福調査も始まりましたので、正式な史跡として保存できるように1998年にこの一帯を地権者から買い取り、私の名義に移転しました。それから、次兵衛神父様のご像を建立し、ミサ用の小祭壇を設置しました。2000年には「マリアの園」のルルドも完成し、祝別していただきました。

◆ 人びとの反応はどんなものでしたか。

洞窟が再発見されたニュースは、口伝えに広がっていきました。全国から巡礼者が訪れるようになり、私はそのすべてに同行していますが、その数は18年間で延べ二千五百人以上にもなりました。若い方(学生)からお年寄りの方、また、京都のお寺のご住職夫妻も来られました。

最近では、長崎西高の放送部のみなさんが次兵衛岩に関する内容の放送で、全国大会までいったと聞いています。また、報道関係者の方々も取材に来られました。

◆ 巡礼者を案内するとき、

心がけておられることは何ですか。

信仰をお持ちの方にはその信仰を強めてもらえるように、信仰から遠ざかっておられる方には、先祖が残してくれた信仰を守り、それを子孫に伝えてもらえるように、そして、ドロ神父様が残してくれた外海のキリスト教文化の流れを知っても

らいたい、という願いを込めています。また私は、それを口ではなく巡礼者と共に足で歩くことで訴えています。それは、自分をイエスさまの「ぞうり」としてはいてもらうことを通してキリストの道真となりたい、との願いがあるからです。

◆ 特別に聖母マリアのご保護を願って

おられるのには、何か理由があるのですか。

それは、私の信仰体験の中で核になるものです。1945年5月に、不思議な出来事がありました。校庭に十字架の形のように見える幅20センチほどの白い部分を見つけたので、近所の叔父さんをお呼びして十字の真中を少し掘ってみると、マリア様の不思議のメダイが出てきました。そこで、神さまはこのマリア様のメダイを通してご自分の存在をお示しになったのではないかと考えました。

それから、この次兵衛岩への巡礼に参加する人には、信者であるなしにかかわらず、いつもこの不思議のメダイを胸につけてもらっています。それは、その巡礼を聖母に見守っていただきたいという願いがあるからです。カトリックではない方々には、「世界の平和のために一緒に祈ってください」と申し上げています。

また4年前に、次兵衛岩まであと一息という地点にマリア像を建て、「マリアの園」と名づけました。古い炭焼き窯の跡を水飲み場に造り替え、溪流から管を引き、自然の水が絶えず流れ出るようにしました。巡礼者はここで休息し、喉を潤し、目ざす次兵衛岩まで登りきる力をいただくのです。

◆ これからのご希望はどんなことですか。

モノは豊かになり、人々はぬくぬくと生きていくように見えます。昔は外からの迫害に耐えていたのですが、今は自分自身の内部からの迫害に耐えるだけの信仰が必要な時代だと言えるでしょう。先祖が命を賭けて守った信仰を子孫や若い人たちに伝えてほしいと願い、またその責任を感じています。そのためにも、特に市町村合併を前にして、この地のキシタンの史跡を外海町の文化財に指定してもらうための努力をしています。殉教地ではないので、「霊場」にでもして、これからも受け継いでほしいと願っています。



山崎さんご夫妻は、いつもと同じように今回も巡礼に先立って、水苔で足を滑らせないように靴に巻き付けるための縄をなつて準備してくださいました。また巡礼の終わりには、食べきれないほどのご馳走でもてなしていただいた。

この巡礼を終えた人たちは例外なく、「また、いつかこの地を訪れたい…」との熱い思いで帰路に着くのである。



Catholic Archdiocese  
NAGASAKI

# 生活の中の教会

## 半世紀

聖堂外に人があふれた。

一九五七年、新敷地造成に

着手。トウガ、ツルハシなど

を持寄り、繕出で拓いた。二

年かかりの大工事だった。

その後、新教会堂建設に取

り掛り、一年の工期を経て、

一九六〇年五月、山口大司教

を迎え、献堂式を行った。

教会堂は、相ノ浦富士（愛

宕山）とその湾を望む小高い

丘に建っている。

かつて一世帯から始まった

教会は、今、四百余の大所帯

となり、相ノ浦の地にしっか

りと根をおろしている。

一九〇六年、久家

三喜松の家族が、平

戸からこの地に移

住。続いて教世帯が

大島から移り住み、昭和初期

には四十世帯ほどになった。

一九三八年、畠山家を借用、

仮聖堂とした。翌年、米倉庫

を購入し、解体、運搬、造成

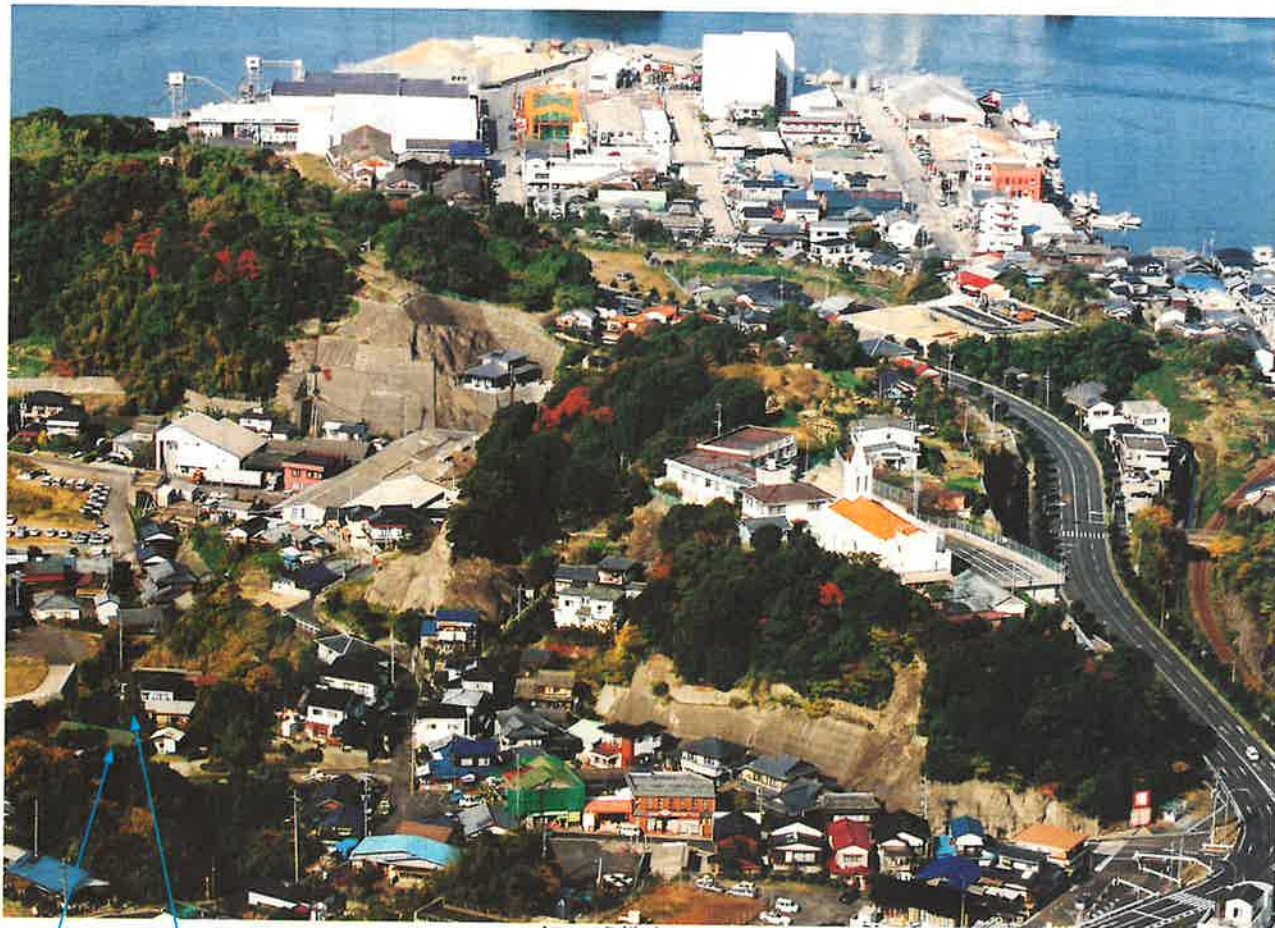
など信徒繕出の奉仕作業を行

い、二年後移築完成し、教会

堂とした。

十年後、炭鉱の景気で世帯

は二百余となり、日曜日には



仮聖堂跡 旧教会堂跡

相ノ浦教会

フォトプラン 山本 富夫